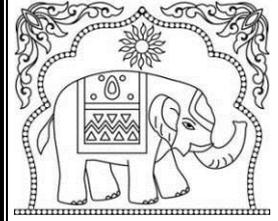


まいとりに मैत्री

No.20 平成 25 年 春号 —2013. 4. 24—
東洋大学仏教青年会・東洋大学仏教会発行機関誌



< मैत्री > :maitrī (マイトリー) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。
仏教では慈 (いつくしみ)・悲 (あわれみ)・喜 (よろこび)・捨 (とらわれない心) という四つの広大な利他の心 (四無量心) の一つです。

《新年度挨拶ならびに総会報告》

おかげさまで今年の 4 月で東洋大学仏教会・仏教青年会の活動は六年目を迎えることとなりました。

昨年度は機関誌「まいとりに」を第 16 号～19 号まで発行しました。毎月の定例研究において渡辺先生のご指導の下、『大智度論』を読みました。また、例年通りサンスクリット、チベット語、漢文の語学勉強会を開きました。その他、東洋哲学研究所「法華経—平和と共生のメッセージ展」見学、東洋大学文学部伝統文化講座「声明公演」協力、仏教伝道協会シンポジウム「問われる仏教・応える仏教」に参加するなど様々な展覧会鑑賞、仏教行事に積極的に参加しました。今年度も語学勉強会や色々な仏教行事への参加、展覧会鑑賞などを通じ、普段の授業とは違った形で仏教に触れる機会を提供できる場になりたいと思っております。本年度も御指導御鞭撻の程よろしくお願い致します。



菅沼晃先生 (写真中央) による講演の様子

さて、2013 年 3 月 30 日に平成 24 年度東洋大学仏教会・仏教青年会総会・講演会が開かれました。会の前半では東洋大学名誉教授の菅沼晃先生に、「“活哲学”を实践した人・境野黄洋」というタイトルで御講演を頂きました。続く総会では写真を用いながら講演、展覧会鑑賞、仏教行事参加の活動報告、収支報告、予算報告、仏教会・仏青役員決定を行いました。

ウルジーヤルガル (東洋大学仏教青年会会長 東洋大学大学院博士後期課程 3 年)

いつまでも寒かった初春もすぎ、本格的な新緑の季節となりました。大学では新入生のガイダンスも終わり、また新たな一年が始まっています。仏青・仏教会も本年 4 月で 6 年目を迎え、また新たなスタートを切りました。すでに熊谷の妻沼聖天、常光院の遠足研修も行われ、会員の活動は盛り上がっています。

5 年前に産声を上げたこの会も、皆様のご協力のおかげでなんとか活動を続けながら、だいぶ定着した感もあります。特にサンスクリット語・チベット語・漢文という三部門の勉強会は、授業ではできないところを補完するというメリットもあり、また広く学外の会員も参加しながら有効に機能しています。講師の方々には今後ともご尽力をお願いしたいと思います。会員諸氏にはさらに積極的に活動に参加していただき、本会が一層活発になることを期待しております。

円了先生の唱えた「活仏教」をモットーに、ともに歩んでゆきましょう。

渡辺章悟 (仏教会会長 文学部インド哲学科<東洋思想文化学科>教授)

【目次】

新年度挨拶ならびに総会報告	……1	仏青副会長挨拶	……2
寄居十二支めぐり	……2	国宝聖天歓喜院と常光院	……3
倉田百三と西田幾多郎②	……4	興福寺の日常②	……5
タイの仏教事情⑭	……6	コラム「日本文化と仏教」⑯	……7
書籍・イベント情報	……9	今後の予定	……10

《仏青副会長挨拶》

本仏青は活動を開始して五年が経ちました。この三月をもって三年間ほど会長を勤められた藤森晶子さんが大学院を修了し、また幹事として長く研修会を取りまとめてきた鈴木伸幸くんが大学を卒業しました。このお二人は仏青の中核を担っていらしたので、お別れするのは非常に残念でなりません。しかし、仏青の活動を通じて仏教文化や人情の機微など、多くのことを学んだと思います。穏やかで思慮深いお二人が、大学内だけではなく、これからは社会で輝くことを期したいと思います。

さて、この四月の六年目からは新体制となります。会長は内モンゴルからの留学生ウルジーガル君です。彼も非常に穏やかで実直な人物で、異国の地で仏教を学び実践する姿には本当に頭が下がります。私も副会長として積極的にサポートし、仏青を盛り上げていきたいと思っています。本年度も渡辺先生の定例研究会や漢文・サンスクリット語・チベット語の勉強会がありますし、5月には仏教講演会及び聲明講演会、夏期休暇中の研修旅行、各種研修会が予定されています。「仏教思想や文化を学ぶ」ことを目的としていますが、実際は他者に配慮しつつ和気藹々と楽しむことが何より重要なのではないかと感じています。仏教会・仏青の会員の皆様にご参加頂き易い雰囲気になるよう、勤めていきたいと思っています。

櫻井宣明（仏青副会長）

《新年度役員紹介》

東洋大学仏教会

会長 渡辺章悟（文学部インド哲学科教授）
副会長 橋本泰元（文学部インド哲学科教授）
事務局長 岩井昌悟（文学部インド哲学科准教授）
幹事 山口しのぶ（文学部インド哲学科教授）
沼田一郎（文学部インド哲学科准教授）
出野尚紀（東洋学研究所奨励研究員）
監査 木村得玄（黄檗宗禅林寺住職）

東洋大学仏教青年会

会長 ウルジーガル（大学院仏教学専攻博士後期課程）
副会長 櫻井宣明（大学院仏教学専攻博士後期課程）
藤井明（大学院インド哲学仏教学専攻博士前期課程）
幹事 鈴木洋志（文学部インド哲学科4年）
鈴木鉄平（文学部インド哲学科2年）

寄居十二支めぐり 「寄居に寄ってみる？」

新年1月13日日曜日 JR 寄居駅改札集合。第一回目の仏青・仏教会行事を飾るような晴天。（翌日成人の日は、大吹雪でした。）私たちの運の良さを証明してくれたようです。ちなみに渡辺先生のお誕生日は1月14日でした。おめでとうございます。

渡辺章悟先生の「寄居に寄ってみる？」とお言葉。今年も切れ味よくスタートです。今回企画は、秩父鉄道 JR 主催「駅からハイキング」を楽しんだことのある渡辺先生のアイデアだそうです。

東洋大学 OB 仏教会会員の村田さんご夫婦、地元近くから大正大学大学院の蓮舎（はすや）さん、韓国留学生の金範松（キムハンソン）さん、中国留学生の常聡さん、学部からは鈴木さん、塚田さん、堀さん、松本さん、そして私（田辺）が参加しました。

寄居は近くて遠い見知らぬ仏国土。巡らせて頂いたお寺は、浄真寺にはじまり、正樹院、西念寺、天正寺（こ

こでお昼。常さんの手造りお弁当の差し入れがうれしい)、正龍寺、善導寺、少林寺の順番です。

発見としては、渡辺先生が教えて下さいました江戸前期の禅僧、月舟宗胡くげっしゅうそうこ> (1618-1696)の揮毫による「正龍寺」と「少林寺」の山号の扁額でした。力強く根の生えた書きぶりは巧拙を越え、時さえも飛び超えて、見た私の心を捉えました。月舟和尚の書が、火伏や魔除にご利益があるというのも納得の墨蹟です。そのはるか向こうからやって来る見えないものが、見る人の心を鎮め安んじせしめる不思議。厄除けという呪の根底になるのかもしれませんが。

善導寺は、別名藤田道場。中世には檀林、僧の学問修行の道場として存在しました。豊臣秀吉の北条氏攻めで衰退したものの、徳川家康入府後にまた再興。本堂の、金竜斎宗信の「百人一首画格天井」(江戸中期ごろ)の華麗さは、寄居が文化の中心であった片鱗がうかがわれます。ちなみに関東十八檀林からは、残念ながらはずれています。



少林寺にて

一番の盛り上がりは最後の寺、少林寺。みんなが息を切らせ登り、枯葉に足滑らせた裏山の羅漢山でした。そこには五百羅漢さんの510体もの石仏群(必ずお顔の似た人が居るようです)、それと秩父緑泥片岩でできた荒神信仰の板碑群の数の多さ、その規模に目を見張りました。まさに千体荒神の名の通りです。頂上の石造釈迦如来坐像が、お顔もやさしくお出迎えして下さいました。

そしてゴールは、秩父鉄道の波久礼駅。駅では駅員さんが、私たち一行をお待ちしていましたと言いながら笑顔をくれました。ローカル線なのでイベントの無い時は、無人駅なのでしょう。到着時間切れで「ちょっぴりプレゼント」は無し。でも、普段は注目しない仏蹟を訪ねる小さな旅は、NHKの番組を超えるたのしさがありません。

ぜひ、もっと多くの仏教会・仏青の会員、学部生さんや院生の方、留学生の方々と一緒にしたいと思います。まさにすべての出会いが、厄除けになる旅になること請け合いです!

田辺雅明(仏教会会員)

国宝聖天山歎喜院と常光院

四月七日、僕は初めて熊谷を訪れた。仏青の研修に参加する為だ。集まったのは九名(うち一人は大正大学の方だった)で渡辺章悟先生ご引率のもとにまず妻沼聖天、そして次に天台宗・常光院を訪ねた。

妻沼聖天山歎喜院は建造物の国宝として埼玉県で第一号であるらしい。その始まりは斉藤別当実盛が治承三年(一一七二年)に祖先伝来のご本尊聖天様を祀ったことにある。

本殿は奥殿(三四㎡)、相の間(二七㎡)、拝殿(一二七㎡)という三相で構成され、廟式権現造りという構造になっているらしい。その中で、一番目を惹くのは極彩色の奥殿。

壁、屋根、縁の下、全てに華やかな意匠が施されており、壁には鮮やかな透かし彫り、方角によって描かれる四季が違い、それぞれに相応しい題の絵となっている。屋根の内側、縁の下には龍や象、獬などの精密な彫刻、全てカラフルに彩られている。全体が立体絵巻のようである。

これらの華やかな装飾にはみな思わずワクワクしてしまうだろう。この妻沼聖天は巨大な宝箱である。それが奥殿を見た時の正直な感想である。実際、ご本尊は秘蔵され、滅多に公開されることは無い。そのご本尊を蔵するに相応しい建築がなされたのだ。

話は変わって、僕は旅行をするとよく雨に降られるのだが、今回も例外ではなく降られた。しかし、今回はい



妻沼聖天の貴惣門

つもとちょっと違って、雨にあたることはなかった。

どういことかという、妻沼聖天から常光院へ移動しようとバスに乗った時のこと、その前から雨の気配があったのだが、バスに乗ったとたん、激しい嵐になった。ところが、常光院に着く頃には晴れ上がってしまった。まったく幸運と言うほかない。

常光院は先の妻沼聖天とは対照的と言っていいだろう。全体が静穏な空気につつまれ、大きな庭は緑に覆われ、本堂はなんと茅葺きである。「渋い」とはこういうのをいうのだろう。心落ち着く美しさを持っていた。

ここでこの目的は所蔵されているサンスクリット語の書を見ることであった。住職の方がわざわざもてなして下さり、色々と話していただいた。とても気さくで、なおかつ穏やかであり、非常に居心地がよかった。興味深かったのは「生きているうちにこの寺を利用してもらいたい」とおっしゃっていたことだ。

元々、この常光院は由緒ある（江戸時代には十萬石を有していたほど）立派な寺院である。それにも関わらず観光地として派手に宣伝することはしていない。それは商業観光化された寺としてではなく、その土地で「生きる」寺として、誰にでも気軽に訪ねてもらいたいということらしい。なるほど、常光院から感じられる安堵感はその内から滲み出ているものであったのだ。常光院はこの先も、この土地で生き続けるのだろう。

追記

妻沼聖天近くの森川寿司店で食べた稲荷寿司がすごくおいしかった。オススメです。

最後に常光院のホームページ (<http://www.s1.inets.jp/~jokoin/>) を紹介します。様々な催しが開かれ、一般の人々へ広く門戸を開放しています。



常光院にて

目黒見（インド哲学科4年）

倉田百三と西田幾多郎 ②

倉田百三は明治24年（1891）、広島県三上郡庄原村（現 広島県庄原市）の裕福な呉服商の長男として生まれた。2年前の明治22年（1889）には大日本国憲法が公布され、3年後の明治27年（1894）には日清戦争勃発という、日本が近代国家としての体裁を整えつつある時代である。倉田家唯一の男子であった彼は両親の期待と寵愛を一身に受け、「蝶よ花よ」と大切に育てられた。

明治43年（1910）、倉田は家業を継ぐことを期待する父を説得し、旧制第一高等学校（以下一高）の文科に進学する。入学後、一時は首席となるなど優秀な成績を修めた倉田だが、父の勧めもあって文科から法科に転じた後は次第に登校しなくなり、飲酒、彷徨、借金と、それまでとは対照的な生活を送るようになる。このような状況に陥った背景について倉田は以下のように述べている。

[倉田]「私は生きている。私はこれほど確かな事実はないと思った。自己の存在はただちに内より直観できる。私はこれを疑うことはできなかった。しかしながら他人の存在が私にとっていかばかり確実であろうか。」（『愛と認識との出発』）
デカルトが「私は考える、故に私は存在する。(cogito, ergo sum)」と言ったように、考える主体としての「自己」の存在は確信できる。しかし、それ以外のものはすべて自分が考え出した幻かもしれない。倉田には他者の存在が「影のごとく淡きもの」にしか感じられなくなってしまったのである。

こうして独我論に陥った彼は、「立身出世」や「性愛」といった様々な欲望を肯定する「極端な個人主義」に走る。だが一方では、他人と調和した安らかな生き方をしたいという優しい心も持ち合わせていた。この二つの板



倉田百三にちなんでかんぼの郷庄原に設置されている「青春ポスト」

狭みに苦しんだ倉田は郊外をあてもなく徘徊し、独り電信柱を抱いて慟哭したという。

しかし、西田幾多郎の処女作『善の研究』（1911）との出会いをきっかけに倉田の心境は一変する。倉田は『善の研究』との出会いについて次のように述べている。

[倉田]「ある日、私はあてなきさまよいの帰りを本屋に寄って、青黒い表紙の書物を一冊買ってきた。(中略)それは『善の研究』であった。私は何心なくその序文を読みはじめた。しばらくして私の瞳は活字の上に釘付けにされた。

見よ！

個人あつて経験あるにあらず、経験あつて個人あるのである。個人的区別よりも経験が根本的であるといふ考から独我論を脱することが出来た。

とありありと鮮やかに活字に書いてあるではないか。独我論を脱することができた?!この数文字が私の網膜に焦げつくほどに強く映った。」(『愛と認識との出発』)

倉田がこれほどまでの衝撃を受けた『善の研究』とはどのような内容だったのか、次稿では倉田が『善の研究』から受けた影響を中心に振り返っていくこととする。

山口修三（仏教会会員）

興福寺の日常 ②

今回はとくに行事のない日の紹介をしましたが、今回は興福寺で行われている定例の法要と月に1回の一般向け講座の紹介をしたいと思います。

興福寺では毎月1・5・8・15・17日の朝、それぞれ決まったお堂で法要を行なっており、これを「寺役（じやく）」と呼んでいます。1日は仮金堂、5日は北円堂、8日は東金堂、15日は国宝館、17日は南円堂とで行なっています。寺役の基本的な流れは唄・散華・読経・宝号・回向という流れですが、1日の仮金堂では唄・散華に加えて梵音・錫杖といういわゆる四箇法要を行います。唄・散華・梵音・錫杖というのはすべて聲明です。17日の南円堂では散華の後に表白・神分・祈願・講問論議が入ります。表白とはその法要の趣旨を述べることです。神分とは法要に当たって護法善神にその法要が妨げなく行われるようお願いすることです。ここでは「大梵天王・釋提桓因をはじめに奉って〔中略〕当所鎮守春日（しゅんにち）権現…」という文言を唱えます。つまりインド神話から仏教に取り入れられた梵天（ブラフマー）や帝釈天（インドラ）に加えて日本の神様にも守護をお願いしているのです。祈願では天下泰平や五穀豊穰・仏法興隆・伽藍安穩などを願います。講問論議では経釈・論釈といい、導師が教典をひとつ、論典をひとつ選んで解説をし、その後、その経論について別の者が質問をするという形式で行われます。これは現在では本当の問答をしているわけではなく、文言のすべてが決まっており、形式的に行うものになっています。興福寺では入寺10年以降に堅義（りゅうぎ）という口頭試験を受けなければなりません。この試験は2時間近い問答をすべて暗記で行わなければならないのですが、その練習のために通例17日の寺役で行う問答は次に堅義を行うものがすることになっておりまして、最近は私が質問者になっています。



興福寺 南円堂

さて興福寺では月に1回、三重塔の西側にある興福寺会館にて興福寺仏教文化講座を開講しています。この講座は13:00より始まる2部構成になっていて、第一講は50分の毎回講師の変わる講義、第二講は90分の1年単位の連続講義になっています。2013年6月8日の講座は私板野が「密教とはなにか」という講義でお話させていただくことになっています。また、2013年4月より第二講では、東洋大学大学院で学ばれ現在は花園大学講師の師茂樹先生に「大乘五蘊論を読む」というテーマで講義していただいています。

その講座後には興福寺本坊北客殿にて「瑜伽の会」を催しています。興福寺の法相宗は唯識派であり、瑜伽行派とも言われますが残念ながらヨーガ（≡瞑想）の方法はほとんど伝わっていません。わずかながら先師の記している数息観（入出息観、アーナーパーナ）を、ここでは行なっています。

板野 弘映（仏教会会員）

タイの仏教事情 ⑭

—タイの寺院 (3) —

前号の続きとして、タイの寺院について紹介したいと思います。

本堂の形

ほとんどの本堂は長方形になっています。スコタイ時代(1240年頃-1438年)の本堂は基台が高く壁がなく、東向きで、他の建物と離して建てられました。アユタヤー時代(1351年-1767年)の初期から壁を取り付けるようになり、入口1つか2つ付けましたが、窓はなく、ただ空気が抜け、光が入るように穴を開けただけでした。建っている場所は仏塔の後ろで、西向きに建っている本堂もあります。

アユタヤー時代の終わりごろは窓がたくさん付けられるようになりました。本堂の基台は舟底型にカーブし、位置や方角ははっきり決まっていませんでした。

ラタナコーシン時代(1782年~現在)になると本堂の形はアユタヤー時代の終わりころの形に似ていますが、たいてい東向きに建てられました。

本堂の飾り

本堂の屋根は一般的に傾斜が急で、破風の一番上には、チョーファーというガルダの頭の形をした飾りがあります。ガルダとは、仏教・ヒンドゥー教の神話の鳥のことです。そして、破風の左右の端にはハーンホン(白鳥の尾という意味)というナーガを表している飾りがあります。チョーファーとハーンホンの間には、屋根にそってバイラカーという飾りがあります。これは、ガルダの翼とナーガのうろこを同時に表しています。

破風には、たいてい木の浮き彫りやしっくい飾りが見られます。その模様には、仏教の帝釈天・ヒンドゥー教のシヴァ神、ヴィシュヌ神などが多いですが、中にはラーマーヤナ叙事詩や王様のシンボルなどの模様で飾っているお寺もあります。



タイ寺院の本堂の上に取り付けられている
チョーファー・バイラカー・ハーンホン

本堂の仏像

本堂で一番重要な仏像は本尊であり、最も高い台座に安置されています。本尊はたいてい悪魔を征服した姿をしたお釈迦様の像ですが、立っているお釈迦様を本尊にしているお寺もあります。本尊の前には、その他のいろいろな仏像が置かれています。

礼拝堂(ウィハーン)

もともと「ウィハーン」の意味は、「住む所」でしたが、後に、お寺の仏像を安置する所として理解されるようになりました。

礼拝堂(ウィハーン)の始まり

ウィハーンは、釈尊時代が長者の夏の田舎の別荘として畑や庭園のような所に建てられていました。畑や庭園はラーラームといいます。雨季になると僧侶は、この場所に修行専念しています。そのころには、仏教を信仰していたビンビサーラ王や長者たちが、僧侶が住むように、アーラームとウィハーンを造ってあげました。

釈尊が亡くなってから600年ほど過ぎたところ、インドの北方ではじめて仏像が造られました。それから後、仏像があちらこちらで造られるようになりました。そして、仏像を安置するために礼拝堂をアーラームの中に建てるようになりました。

(この記事は、チュラーロンコーン大学成人教育センターにより出版した「タイ文化の魅力 歴史 美術 建築 他 観光ガイドの手引き」pp.88-90を参考にして執筆したものです。)

プラマハチャップン (Phramahāchatpong Katapuñño) (仏教会会員 東洋大学東洋学研究所奨励研究員)

~「日本文化と仏教」⑱~

幸田露伴の「風流仏」

仏教会会員 作家 永田道子

幸田露伴は慶応三年(1867)、時代がまさに明治に変わる前年に生まれ、明治、大正、昭和にわたって活躍した文豪である。尾崎紅葉とともに紅露時代といわれて一世を風靡したが、中年期には小説家としてより、史伝、随筆、研究考証、注釈など多岐にわたる碩学として知られた。代表作の「五重塔」は岩波文庫にも所収されている。

尾崎紅葉、坪内逍遙、森鷗外、夏目漱石ら同時代の作家たちが皆、恵まれた環境に生まれて高等教育を受けたのに対して、露伴にはさしたる学歴がない。幸田家は代々、江戸城で大名の取次を勤めるお坊主衆で、法制や有職故実詳しく学芸にも縁が深い家だったが、父は維新後は大蔵省の下級官僚になったものの薄給で、一家は困窮を余儀なくされたのである。露伴はやむなく旧制中学を一年で退学、次に入学した東京英学校(現在の青山学院大学)も一年で退学、まともに卒業したのは就学一年の電信技士の職業訓練校だけだった。彼はしかし稀代の読書家だった。幼少から草双紙を読み漁り、英学校時代は当時、湯島の聖堂にあった東京図書館に通って四書五経、歴史書、仏典論書など漢籍類を片端からわがものとした。18歳で『易経』を愛読していたというから恐ろしい。

明治という時代のせい、それとも恐るべき早熟ゆえか、少年から一足飛びに成熟した大人になった感がある。その頃、坪内逍遙が『小説神髓』を発表し、新文学の胎動に大いに刺激された彼は小説家を志す。22歳で処女作「露団々」を発表して紅葉ら文人や漢学者と交わるようになり、翌明治22年から次々に短編・中編を発表。この『風流仏』で一躍天才を謳われ、読売新聞社に客員として迎えられた。その後数年の間に「対髑髏」「いさなとり」「五重塔」などの名作を次々に発表、その旺盛な創作力は驚嘆に値する。

仏教との出会いは、北海道の余市に下級技士として赴任した19歳の頃、東京から持参した漢籍を読み尽くし、地元の禅寺の住持の好意で仏教書を読み漁ったのがきっかけだった。実家はカトリックに改宗し、露伴も父の勧めで聖書に親しんだが、家族の中で唯一、改宗を拒否。24歳のときには剃髪し、筑波山に籠って坐禅修行もした。

「風流仏」は2年後に書かれた「五重塔」の前哨ともいべき作品で、テーマもおなじく命がけで制作に打ち込む木彫師のすさまじい執念、それゆえの狂気と精神の昇華である。興味深いのは各章のタイトルに十如是をあてる凝ったつくりで作者の意図を示し、通俗小説の中に仏教小説の味つけを加えていることである。

発端 如是我聞	上 一向専念の修業幾年 下 苦勞は知らず勉強の徳
第一 如是相	書けぬ所が美しさの第一義諦
第二 如是体	粹(すい)の父の子 実の母の子
第三 如是性	上 母は嵐に香の迸(はし)る梅 下 子は岩蔭に咽(むせ)ぶ清水よ
第四 如因	上 忘れぬのが根本の情 下 思ひやるより増長の愛
第五 如是作	上 我を忘れて而生其心(にしようごしん) 中 仁はあつき心念口演 下 弱きに施す能以無畏
第六 如是縁	上 種子一粒が雨露に養はる 中 実生二葉は土塊を抽(ぬ)く 下 若木三寸で螻蛄(けらあり)に害(そこな)ふ
第七 如是報	我は飛来ぬ他化自在天宮に
第八 如是力	上 楞嚴呪文の功も見えぬ愛欲 下 化城論(喩)品の諫めも聴(きか)ぬ執着

- 第九 如是果 上 既に仏体を作りて未得安心(みとくあんじん)
 下 堅く妄想を捏(でつ)して自覚妙諦
- 第十 如是本末究竟等 上 迷迷迷(めいめいめい)、迷ひは唯識所変ゆゑ凡
 下 恋恋恋(れんれんれん)、恋は金剛不壊なるが聖
- 団円 諸法実相 帰依仏の御利益 眼前にあり

珠運という名の木彫師が奈良へ修行に向かう途中、木曾の宿で出会った貧しい花漬売りの娘お辰の窮地を救い、夫婦約束を交わすが、婚礼の直前、娘は生き別れの父の父に拉致されてしまう。幕末の志士だった男が維新後、功成り遂げて子爵になっており、昔、芸妓に生ませたまま行方知らずになった娘を探し当てるといふ設定がいかにも時代を感じさせる。

珠運は恋しさと未練と屈辱に悶々としながら彼女の彫像を彫る。捨てられたと恨み、また、かならず自分のもとに戻ってくると信じ、周囲が常軌を逸したと案じるほどのめりこんだ。「第九 如是果 上」では、お辰の像に花の綴衣(つづれころも)を彫り着せ、後光輪までつけて、観音化身のごとく荘厳して満足した珠運だったが、しかし疲れきって眠った夢に現れたお辰はそれよりはるかに美しくなまめかしく、像がひどく醜悪に思えた。

次の「下 堅く妄想を捏(でつ)して自覚妙諦」の一節、

「腕を隠せし花一輪削り二輪削り、自己が意匠の飾を捨て人の天真の美を露はさんと勧めたる甲斐ありて、なまじ着せたる花衣脱するだけ面白し。終に肩のあたり頸筋のあたり、梅も桜も此君の肉付の美しきを蔽ひて誇るべき程の美しさあるべきやと、截ち落し切り落し、むつちりとして愛らしき乳首、是を隠す菊の花、香も無き癖に小癩なりきと刀急しく是も取つて払ひ、可笑や珠運自ら為たる業をお辰の仇が為たる事の様憎み、今刻み出す裸体も想像の一塊なるを実在の様に思へば、愈々昨日は愚なり、玉の上に泥絵具彩りしと何が何やら独り後悔慚愧して、聖書の中へ山水天狗楽書したる兒童が日曜の朝字消護謨に気をあせる如く、周章狼狽一生懸命、刀は手を離れず手は刀を離さず、必死と成つて無我夢中、きらめく刃は金剛石の燈下に転ぶ光きらきら截ち切る音は空駟る矢羽の風を剪る如く、一足退つて配合を見糺す時は琴の糸断へて余韻のある如く、心糾々気昂々、抑も幾年の学びたる力一杯鍛ひたる腕一杯の経験修練、渦まき起つて沸々と今拳頭に迸り、倦も疲も忘れ果て、心は冴渡不乱不動の精進波羅蜜、骨をも休めず筋をも緩めず、湧くや額に玉の汗、去りも敢ざる不退転、耳に世界の音も無、餓も渴も顧ず、自然と不惜身命の大勇猛には無礙無所畏、切屑払ふ熱き息、吹き掛け吹込む一念の誠を注ぐ眼の光り、凄まじきまで凝り詰むれば、爰に仮相の花衣、幻翳空解脱して深入無際成就一切、荘厳端麗あり難き実相美妙の風流仏、仰ぎて珠運はよろよろと幾足うしろへ後退り、ドッカと坐して飛散りし花を捻りつ微笑するを、寸善尺魔の三界は猶如火宅や。」

フリガナなしでは読めない難解さだが、煩雑になるのであえて省略した。尚、原文は旧字だが新字に改めた。繰り返すが彼はこれを23歳で書いたのである。ただし、井原西鶴や草紙本に倣った俗っぽい軽妙さと、漢籍や古典に馴染んだ文語体が入り混じった文体は当時から一般の読者には難しく読みにくいと不評だったようである。

内容にもどろろ。その頃、東京でお辰改め子爵令嬢の結婚が決まり、珠運も新聞記事で知るところとなった。

「第十 如是本末究竟等 下 恋恋恋、恋は金剛不壊なるが聖」

「あゝら怪しや、扱は一念の思を凝して、作り出せしお辰の像に、我魂の入つたるか、よしや我身の妄執の憑り移りたる者にもせよ、今は恩愛切つて捨、迷はぬ初に立帰る珠運に妨なす妖怪、いでいで仏師が腕の冴、恋も未練も段々に切捨くれんと突立て、右の手高く振上げし鉈には鐵をも砕くべきが、気高く仁しき情溢るゝ計に湛ゆる姿、さても水々として柔かそうな裸身、斬らば熱き血も迸りなんを、どうまあ邪見に鬼々しく刃の酷くあてらるべき。恨も憎も火上の氷、思はず珠運は鉈取落して、恋の叶はず思の切れぬを倒るゝ音して天より井でしか地より湧きしか、玉の腕は温く、我頸筋にからまりて、雲の鬢の毛匂やかに頬を摩るを、ハット驚き急しく見れば、有し昔に其儘の。お辰かと珠運も抱しめて額に唇。彫像が動いたのやら、女が来たのやら、問ば拙く語らば遅し。」

打ち砕こうとしてできない懊悩の果ては錯乱狂気である。ラストの「諸法実相 帰依仏の御利益眼前にあり」では、「恋に必ず、必ず、感応ありて、一念の誠御心に協ひ、珠運は自が帰依仏の来迎に辱なくも拯ひとられて、お辰と共に手を携へ肩を駢べ悠々と雲の上に行し後には、白薔薇香薫じて……」として哀れな仏師を救っているが、小説としてはいささか蛇足の感がある。

(日本近代文学大系第6巻『幸田露伴集』 角川書店)

《書籍・イベント情報》

○《書籍》

・Shinran's Kyogyoshinsho : The Collection of Passages Expounding the True Teaching, Living, Faith, and Realizing of the Pure Land

Suzuki, Daisetz Teitaro(TRN)/Mayeda, Sengaku (FRW)
(Oxford Univ Press)

鈴木大拙による『教行信証』の英訳。1973(昭和48)年6月30日、親鸞聖人御誕生800年・立教開宗750年記念として、英訳『教行信証』が刊行された。本書はイギリス、オックスフォード大学出版社より再版・発行されたもの。

・『新・サンスクリットの実践 - 実例文で学ぶサンスクリット文の読み方』

菅沼晃 /著 (平川出版社 7350円)

元東洋大学学長による著。サンスクリット文を読む人に必携の一冊! サンスクリット文を読むには、語の用法、文の構造や表現法慣用句の用法などに習熟しておくことが必要。本書は、インドの叙事詩、文学、哲学、仏教經典、法典などから約1400の実例文を用いて、サンスクリット文が容易に読めるように懇切丁寧に解説する。

・『仏教は宇宙をどう見たか: アビダルマ仏教の科学的世界観』

佐々木閑 /著 (化学同人 1890円)

『アビダルマコーシャ』(『俱舍論』)が示す「この世界のあり方」と現代的な科学的世界観が交わるとき、世界はどんな姿を見せるのか。仏教と科学の接点を考える。

・『インド初期密教成立過程の研究』

大塚伸夫 /著 (春秋社 23100円)

著者の大正大学への学位請求論文。三世紀から七世紀前半にかけて成立した密教經典をもとに、インド初期密教の成立過程をとく。

・『落語で大往生 - お説教のススメ』

亀井鉦 /著 (興山社 1785円)

落語41編を紹介しながら、その仏教の含意をわかりやすく説教する。「寺門興隆」連載のもの。

・『修行僧の持ち物の歴史』

西村実則 /著 (山喜房佛書林 9450円)

仏教における所有・持ち物についての総論(所有と無所有、裸形僧との違い)と各論(三衣一鉢・経巻・香・数珠・冠・

水瓶・葉・鐘)。付論として神通力と千仏。平成14年から23年に発表した論文18本をもとにしたもの。

○《イベント》

● 千葉市美術館 「仏像半島-房総の美しき仏たち-」

豊かな大地と海とを背景に、多くの寺院が建立され、さまざまな造形活動が展開されてきた房総半島。本展は、近年見いだされた諸仏や最新の研究成果を視野に入れ、改めて房総の仏教文化の本質を探ろうとするものです。房総半島各地から選りすぐられた仏像百余体を、立体的に配置し、劇的な展示空間でご紹介。長らく非公開であった秘仏や新出の仏像を数多く含む、まさに決定版。また、声明公演やインド舞踊等も会期内に開催される。

日時: 4/16(火)~6/16(日)

日~木曜日 10~18時 金・土曜日 10~20時

観覧料: 一般1000円 学生700円 (高校生以下は無料)

会場: 千葉市美術館(千葉市中央区中央3-10-8)

● 東日本大震災復興支縁 善光寺出開帳両国回向院

「善光寺出開帳両国回向院」は、東日本大震災で亡くなった多くの方々のご供養と被災地の復興支援を目的とし、善光寺御本尊のご分身である出開帳仏や陸前高田の被災した松で造立された地藏菩薩像などを奉じて厳修する。そして、「如来様との結縁により復興の光を届けたい」という思いをこめ、収益を震災被災地の復興に充てる方針です。また、今回の出開帳では法要の他に、様々な催しを予定しているとのこと。

日時: 4/27(土)~5/19(日) 9時~17時(最終入場16:30)

観覧料: 大人(高校生以上)1000円 小人(小中学生)500円

会場: 諸宗山 回向院(東京都墨田区両国2-8-10)

● 川崎市市民ミュージアム「川崎大師の寺宝と信仰」

川崎大師・平間寺の歴史とともに、現在まで伝えられてきた仏画を中心とした数多くの寺宝を展覧するとともに、「厄除け大師」としてのその信仰の姿を紹介。

日時: 4/20(土)~6/2(日) 9時30分~17時(月曜は休館日)

観覧料: 一般800円 学生または65歳以上600円

中学生以下無料

会場: 川崎市市民ミュージアム(神奈川県川崎市中原区等々力1-2)

～ 東洋大学仏教青年会・仏教会、今後の予定 ～

《行事》

講演会・声明公演

・一部 講演会：エンターテイメントとしての仏教

主催：東洋大学仏教青年会・仏教会

協力：東洋大学文学部東洋思想文化学科

・二部 声明公演：自心の源底を観る～大曼荼羅供～

主催：東洋大学文学部東洋思想文化学科

協力：東洋大学仏教青年会・仏教会

日時：6月1日（土）14：30 ～ 17：30（14：00開場）

場所：東洋大学井上円了記念館ホール（白山キャンパス 5号館 B2階）

東洋大学国際哲学研究センター第3ユニット主催国際シンポジウム

「共生の哲学に向けて一言語を通じて古代アジアの人々の価値観を探る」(Towards Constructing a Philosophy of Coexistence: Investigating the Values of Ancient Eastern People through Languages)

主催：東洋大学国際哲学研究センター第3ユニット

協力：東洋大学仏教青年会・仏教会/TCCW JP (Tibetan Center for Compassion and Wisdom in Japan)

日時：6月22日（土）13：30 ～ 17：00

場所：東洋大学125周年記念ホール（白山キャンパス8号館8階）

《語学勉強会》

※勉強会についてのお問い合わせは下記の連絡先にお願いいたします。（会員は無料で参加できます。）

○仏教漢文講読会

講師：佐藤厚

日時：隔週土曜 4限

内容：「懺悔文」、「般若心経」など、よく知られた偈文や經典類などを材料に漢文および思想の解説をします。読誦や歌にも力を入れて身に付く講義を目指します。参加希望者は佐藤<sato_inbuds@yahoo.co.jp>までご連絡ください。

○サンスクリット文献勉強会

講師：出野尚紀

日時：隔週水曜 6限

内容：『アヴァダーナ』を読みます。初心者大歓迎です。参加希望者は鈴木<li1000041@toyo.jp>までご連絡下さい。

○チベット文献講読会

講師：石川美恵

日時：隔週月曜 18：30～20：00

会場：6号館4階6408教室

内容：ツォンカパの『ラムリム』『菩提心の儀軌』の章を読みます。チベット語初心者も歓迎です。参加希望者は石川<danakoshajp@yahoo.co.jp>までご連絡下さい。

※随時会員を受け付けています。入会希望者は下記までご連絡下さい。会員規約・活動内容・受付手続きなどの詳細はホームページ<<http://www.toyo-yimba.org>>をご覧ください。また、紹介したい行事や掲載したい記事などがございましたら、下記のアドレスまでご一報下さい。

編集後記

早いもので、もう四年生になってしまいました。最後の一年が実りあるものとなるよう、日々を大切に過ごしていきたい今日この頃です。本年度も皆様で協力し、仏教会・仏教青年会を盛り上げていきましょう。

編集責任者：鈴木洋志（インド哲学科4年）

東洋大学仏教会

卒業生、一般：年会費 3000 円、特別賛助一口 5000 円

東洋大学仏教会事務局長 岩井昌悟

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学インド哲学科第8研究室気付

Tel: 03-3945-7393(-7357) E-mail: tba.bussei@gmail.com

東洋大学仏教青年会

学生：年会費 1000 円

東洋大学仏教青年会会長

ウルジージャルガル

db0900044@toyo.jp

URL: <http://www.toyo-yimba.org>